

---

# 同行者

しのぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同行者

### 【ノート】

N00760

### 【作者名】

しづ

### 【あらすじ】

ネットで知り合った人々が自殺を図ります。

**(前書き)**

これはフィクションです。決して真似しないでください。自殺ダメ絶対。

僕は駅前の公園を歩き回りながら空を見上げた。  
まだ早朝で、空気はひんやりとして、空は晴れ渡っている。

そんなきれいな空を眺めていたら、涙が流れた。

やがて黒いワゴン車が公園の前に止まった。

僕はそちらに向かって歩いた。車のドアが開いて、二十代前半くらいの女性が降りてきた。

「あなたが“狂骨”さん？」

「はい。そうです。」

「私は、“帯金”（おびがね）よろしくね。」

帯金さんは、場違いなくらいにこやかに言った。

「よろしく・・・お願いします。」

僕は頭を下げた。

ワゴン車の中にはあと二人の男性、一人はスキンヘッドに眼鏡の二十代後半くらい、もう一人は腕に刺青のある、ガタイのいい三十代くらいの人だった。

スキンヘッドの人が言った。

「僕は“モンブラン”です。よろしく。」

刺青の人が言った。

「俺は“牡丹”よろしく。」

「“狂骨”です。よろしくお願いします。」

僕はそう言つて車に乗り込んだ。

そしてちらりと後ろを振り返つた。

いつもの公園だった。あまりにも普通の・・・  
でもこれが見納めだ。

僕はこれから自殺しに行くのだから。

僕はネットの自殺者募集サイトで知り合つた仲だった。合つのは初めてだ。

牡丹さんが車を運転し、僕は目的地の山の中に向かった。

しばらくして牡丹さんが言った。

「なんで死ぬ事にしたか、みんなで打ち明けないか？」

僕達はお互い、自殺の理由を言っていなかった。

帯金さんが言った。

「やめようよ。」

沈黙。

「・・・話したければ話してもいいけど、私は言いたくないし、話したくなければ、誰も言わなくていいよ。」

牡丹さんが言った。

「・・・そうだな。すまん。」

モンブランさん「・・・僕も、遠慮します。」

僕は黙っていた。

誰も、それ以上は追及しなかった。

僕達は、道中他愛もない話をしながら過ごした。まるで、これからキャンプにでも行くかのように。

目的地に着いた。

モンブランさんが何かをバッグから取り出した。

七輪だった。

帯金さんがビニールテープで目張りを始めた。

僕達は練炭自殺をするつもりだった。

一番楽な死に方だと聞いていたから。

僕と牡丹さんは車を降りて立っていた。

山の空気は清浄で涼しげで、こんな目的で来たのでなければ、もっと楽しかっただろうと思った。

牡丹さんがポケットから葉巻を取り出して吸いはじめた。

そして僕にも聞いた。

「吸うかい？」

「え・・・はい。いただきます。」

実を言うと大して欲しくもなかったけれど、いまから一緒に死ぬ人と、何かを分かち合いたかった。

煙を吸い込んだ。

甘いバニラの香りだ。

さすがに緊張で心臓がどくどくいついていて、血行がよくなっていたので葉巻はよく効いた。

牡丹さんが言った。

「まだ余ってるんだよな、葉巻。最後に全部吸いてえよな。」

そこへモンブランさんと帯金さんが降りてきた。

帯金さん「何吸ってるの？タバコ？」

牡丹さん「葉巻だよ。まだ余ってるけど吸うかい？」

帯金さん「いただきます。モンブランさんは吸う？」

モンブランさん「いただきます。」

僕達は、車の横に並んで黙々と葉巻を吸った。

バニラの香りが立ち込める。

練炭の香りはどんなだろうか。

こんなに優しい香りではないはずだ・・・

帯金さんが言った。

「キレイな山だよね。」

モンブランさんが言った。

「そうですね。」

「ああ」「うん」僕と牡丹さんも言った。

「こんなキレイな所で死ぬるならきつと幸せだよね……」

カラスがバタバタと音を立てて飛び立った。

どこかから、鳥の鳴き声が聞こえた。

帯金さん「まだ葉巻ある？」

牡丹さん「今吸ってるので最後だよ。」

帯金さん「そつか……これが最後だねえ」

僕は黙っていた。

葉巻はじりじりと燃えて減っていき、指の手前まで来て……道路に落ちた。

すると牡丹さんはそれを拾って携帯灰皿に入れた。

牡丹さんは皆の分もその灰皿に入れた。

僕はなんか意外な気がした。

こついうのって、そのまま捨てていそふなイメージがあつたから……



モンブランさんが言った。

「行こうか」

皆は黙って車に乗り込んだ。

最後は僕だった。

僕はためらった。

でももう、皆は乗り込んでいて、七輪には練炭が乗っている。ここまで来て引き返すわけには・・・

僕の前には乗り込んでいたのは帯金さんだった。

帯金さんは、僕がためらっているのを見て、優しく言った。

「狂骨くん・・・

もし迷ってるなら、いつでもやめていいんだよ？

私達、誰も責めないから。」

牡丹さんとモンブランさんもうなずいて、僕を見つめた。

そこには、限らない優しさがあって・・・僕は急に涙がこみあげてきた。

僕は元々、人と目を合わせるのが怖いタチだ。でもこの時は、真正面から皆の目を見て、何の恐怖も感じなかった。

僕は目を拭いて言った。「いいえ、乗ります。僕も、一緒に行きます。」

誰が練炭に火を付けたのか知らない。

皆は苦しみ始めた。

僕は辛かった。

自分も苦しかったし、皆が苦しんでいるのを見るのが辛かった。

僕は車の隅で丸まって、目と耳をふさぎ、必死にこらえた。

これで終わりなんだ。これで、何もかも終わるんだ・・・！

すると突然、異常なほど鮮やかに、すごく昔の記憶がよみがえった。僕はまだ小学校にあがる前くらいの年齢で、家の前の庭で、地面の阿りを眺めている。

陽光が差し、葉っぱについた水滴が光っている。

家の方から、母の呼ぶ声が聞こえる。

「・・・ちゃん、帰っておいで・・・」

気が付くと僕は、天井の蛍光灯を見上げていた。

辺りを見回すと、どうやら病院のようだ。

看護師が僕を見て、

「先生、目が覚めました。」

と言った。

すると医師が入って来て、そして・・・両親が入って来た。

両親は僕に取りすがって泣いた。

・・・僕は、なんとなく両親に怒られるんじゃないかと思っていた

が、両親はただ、よかった、よかった、無事でよかった・・・と言っただけだった。

僕は泣いた。いい年をして泣いた。止められなかった。

・・・そして僕は、帯金さんと牡丹さんとモンブランさんが全員死んで、僕だけが生き残った事を知った。

どうして僕だけが生き残ったのかは謎だった。あの車の隅の目張りが甘かったのだろうか。

だが、理由などどうでもいい。

皆が死んで、僕だけが生き残ったという事実があるだけだった。

僕は奇跡的に後遺症らしい後遺症もなく、すぐ退院して仕事に行った。

仕事を休んだのは一日だけで、会社には病気だったと言っていた。

あまり早く復帰したので両親は心配したが、僕は、自分が自殺未遂した事を会社に知られなくなかったのだ。

お昼、食堂にいと、隣の席で食事していた人たちが、僕達の自殺事件の事を話していた。

僕は、胃にずしりと重さを感じた。

「・・・でさ、その人がたまたま通りかかって見付けたりしいよ。まあすでにみんな死んでたらしいけど。あ、一人生きてたんだっけ？」

「へ、最近よく聞くね。そういうニュース。でもなんつーか、逃

げだよ、そういうのって。

それに、そういうの発見しちゃったら嫌じゃん？  
死んでもいいけど、他人に迷惑かけんなって。」

「でも、電車の飛び込みとかよりマシじゃん？」

「あ、確かに。俺、朝それで電車が遅れるとイラッとするもん。  
迷惑なんだよ。」

僕は立ち上がって叫んだ。

「やめろよ!!！」

彼らはびつくりして僕を見た。

食堂にいた他の人達も僕を見ていた。

僕も自分で驚いていた。自分がこんな風に怒鳴るなんて思いもしなかった。

僕はいたたまれなくなって、食堂を出た。

廊下を歩きながら、僕は少し後悔した。なんであんな風に叫んでしまったんだろう。

でも同時に、かつてないほど、僕は間違っていないとも思った。

僕の脳裏にはあの光景が焼き付いていた。  
帯金さんが、

「いつでもやめていいんだよ？  
私達、誰も責めないから。」

と言い、モンブランさんと牡丹さんがうなずいて、僕を見つめている光景……

僕は帯金さんたちの事を何も知らない。

本名さえ。どうして死んだのかさえ……

でも僕は彼らと死の淵まで行ったし、その先までも行くはずだったのだ。

僕は正直、まだ、これから生きていけるかどうか自信がなかった。でも、少なくとも生きている限り、僕は彼らの悪口を言われて黙ってはいけけないのだと思った。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0076o/>

---

同行者

2011年10月7日15時47分発行